ふるさとの民話　（第三十七話）

『練藪の観音』

石崎の漁師が、網を入れても入れても魚がとれない日が続いた。おかしいおかしいと思いながら、漁師たちは、漁を続けていた。すると、海がキラキラ光り、どこからか光が射し込んでいるのに気づいた。

不思議に思い、その方角、八田、中挟の山の山頂を見上げた。まぎれもなく、山の頂上から、輝く光が出ていた。「この光のため、魚が寄りつかないのか。」と、さっそく、その山頂の地を掘ってみると、なんと、出てきたのは「観音様」でした。

長らく、土の中に埋没されていたのか、著しく、形相を損じていたが、胎内佛は、損傷もあまりなかった。

さっそく、江曽山の練ヶ谷内に、御堂を建てて、お奉りした。年々、佛事を執り行っていたが、練ヶ谷内は、かなり、山へ入ったところであり、人も途絶えがちになった。ついつい、御堂等の修理も思うに任せなかった。山の風と共に、「観音様」の「寂しい、寂しい」との、ささやきが伝わってきた。

明治の末期、その御堂を、在の妙楽寺へ移した。その後、石崎の漁師は、キラキラ光るものもなくなり、魚も戻り、いつも豊漁でした。漁師たちは、これも、「観音様」の御利益と喜んだ。

この「観音様」は、石動山や白山の開基である「泰澄大師」の作といわれ、畠山氏落城の際、避難民が、高塚山の山頂に埋めて逃げて、後日、掘り起こそうとしたのが、そのままになったものといわれています。

（江曽町　伝承）

→